あたしの握力計

椎名ひろか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あたしの握力計

【Ｎコード】
Ｎ５８１８Ｌ

【作者名】
椎名ひろか

【あらすじ】
つまらない学校生活。
前まで好きだったあいつへの想いはなんだか急に冷めた。
でもその思いもいつからか再び恋へとなって行く。
あいつが握力計になってからは――――。

序章

なんだかかなり憂鬱で、身体(からだ)中に倦怠感がのしかかっている。
制服を纏うとなんとなくそんな気がする。
そろそろこの学校に入って1ヶ月半は過ぎようとしているのに。
これまでそんなに大きな行事は行った記憶がない。

なんだかとても気が重たいし、授業は長いし。
眠くて眠くて仕方がない。でも、睡眠前の趣味へと費やする時間がどれだけ貴重かと思うと
睡眠時間を急激に増やすことはできないのだ。たったの30分でさえも。
最近早寝が出来ない身体になってきた。しかも早起きなんて無理。
絶対。
そんなこんなで無理矢理身体(からだ)を引きずってここまで来てる。
正直、一日中部屋にこもって布団に埋もれていたい。

今回のスポーツテスト、忘れたいものは大体忘れられた。
でも1つだけ・・・1番悪かったものがやっぱり印象づいている。
握力だ。これが一番悪い・・・この歳で平均だとあたしの2倍は無くてはならない。どうしよう。
こういうのって他人の握力が妙に気になる。
だから、友達に聞くことにした。

「ねぇ、握力何kgでしたぁ？」

序章（後書き）

グダグダな小説でごめんなさい。

いつもあきっぽいので、いつも完成してから投稿しようと思っておりました。

ですが、今回は思い切って途中で投稿してみます。

マイペース更新ですが、よかったら気長に読んでください。

第一章

みんなうーんと唸りこんで思い出している。
あたしだったらすぐパッと出てくる。

「27・・・ないくらいかなっ」

幼馴染の蓮華(れんげ)が言った。
ツヤツヤできれいなポニーテールをゆらゆらさせながら言った。
27か・・・ほど遠いかもしれん。
するとひょこひょこと声が聞こえてくる。
隣の席に無断で座り、おさげヘアーの朱(あけみ)が

「あけみは22っ！」

20を切る奴はいないのか・・・。

「あずちゃんはっ？」

あずってのはあたしの名前。苗字は中西(なかにし)。
とりあえず適当に笑ってごまかしておいた。
そしたら「なんだなんだと」前方の席の駿弥(しゅんや)がこちらを向いた。
女の子の会話の中に首をはさみこむ。

「俺は24ね」
「あー・・・そうですか」

そして蓮華様に掌を握ってもらうことにした。
痛い痛い・・・掌がつぶされて行くかのよう。

「・・・自重してください」
「え・・・？じちょん？」

さらに掌は強く握りしめられた。
痛みをこらえながらも朱の方へと視線をやる。
どうやら駿弥と一緒に握り合っているようだ。

「あぁ・・・・もういいです・・・」
「ふぅーっ！」

蓮華はくるりと一回転をして見せた。
回って誤魔化すのは別として、右手を握らせるんじゃなかったと思う。
するとこんどは朱が

「握ってっ！」

なのであたしはゆっくりと手を差し出す。
今度は左手ね。まずはあたしから握ってみる。

「あははっ痛くないねぇー」
「・・・うぅっ」

後者は悶える声である。
握力を確かめ合ったが妙に蓮華と朱の差がありすぎる・・・。
きっと、平行に握ってるのか垂直なのかの問題かな。

「えぇー、そう？そんなに蓮華変な握り方したっ！？」
「あ・・・いやぁ・・・はいっ」

んもうっと怒られた。
ほんとですよ。握り方が酷いです。
っとここで予鈴が鳴る。
６時間目の授業・・・今日は特別に部活は無し。
うちの部だけだと思うけどね。
普通、吹奏楽部がこんなにすんなり休日にしちゃっていいのかね・・・？

それぞれ席に着いた。
もうほとんどのひとが夏服。
本当は１３歳になるまで冬服で通そうと思っていたけど、あまりにあっついので諦めた。
１３歳になるまであと１週間を切ったこの日である。
つまらない授業を終えると一同起立、礼。
そして帰りの準備をして押し出されるかのように一同は教室から流れ出た。

第二章

それは、靴を取っている時だった。
ぽんぽんとあたしの肩を叩く。
それは――

「んっ」

手を差し出してきたそいつはもう片方の手であたしの右手を握っている。
廊下に人が蠢(うごめ)いている中、何をしたいのかまったくわからない。
でもそいつはあたしの手を放そうとする動きは無かった。

「そういえば、まだお前と握ってなかった」

そう、それは駿弥である。
なんだか心が温かくてとっても楽しい一瞬だったかな。
頑張って少し柔らかい掌を握った。ありったけの力を込めたけど、
駿弥の顔は
手が痛いと云うよりも、とても楽しそうに見えた。
さっき蓮華のせいでどうかなった右手が一瞬で元に戻った――気がした。

「よっわいな。　ぎゅうぅ――」

弱いのはお互い様だよと言いたかったけど、なんとなく口を閉ざした。
廊下を歩く人々のざわめきは、もう聞こえない。
そのくらい不思議な感じがした。でも、たった一瞬・・・刹那の時

だったわけで。

「あ・・・いっけない。俺、部活あるから！じゃあね」

「あー・・・うん」

あたしの足取りはスタスタ歩きからスキップに変わっていた。

あたしは気付いた。自分の気持ちに。

駿弥のことが好きという事を。

第三章

実は、今回よりも前に一度だけ駿弥を好きになった事があった。
それはまだ幼いころで、幼いなりに頑張っていたが、中学に上がったとたんその気持ちがすでに冷めていた事を自覚した。
席替えをするとき、あんなに隣になれますようにと願っていたのに、あいつの後ろの席になったのにちっともドキドキしなかった。
いつしかあたしの中で、駿弥はふつうの友達にしかなってなかった。
でも、消えかけてた火が、手を握られたせいでちまちまと再び明かりをともした。
なんだか・・・こんなにきゅうんとなってしまったのは久しぶりな気がする。いつぶりだろう。

次の日、なんだか昨日のあの気持ちを思うと学校もそう億劫でもなくなった。
アンニュイな学校生活が少し楽しい気がしてきた。

「おっはよー」

朱がとことことやってきた。

「あー、おはよ・・・」

やっぱり、学校へ来ると口数が減る・・・。
なんでかしらないけど・・・。喋る気が失せるというか・・・

「ねっ、朱。あのさぁ今日遊べるでしょ？」
「あー、うんいいよぉ」
蓮華も駆け寄ってきて2人で仲良く話している。
2人の笑ったり、はしゃいだりしてるところを見てると・・・エネルギーを是非とも分けていただきたい。

「んーじゃあさー、なにしよっか」
「そうだねー、えっと・・・」

お邪魔虫のあたしはここで退散する事にする。
周りを見渡すが、まだみんな席に着席しているご様子は覗(うかが)えない。
することもないのでボーっとしていた。

しばらくボーっとして、好きな音楽を脳内再生していた。
すると前方からドサッというよく耳にするが重たそうな音がした。
その音で飛んで行ったあたしの魂が堕ちて舞い戻ってきた。

駿弥である。ここで「おはよう」なんて言えたらいいのだが、あたしはそんなキャラできたつもりはないし、
正直喋りかけてきたら希少価値な無口キャラなわけで。
急に話しかけられたら「・・・はい」しかいえないだめなキャラで
前方にいて邪魔な人物に「あーうーあーうー・・・」しかいえない
独り言女のはずである。

「おはよっ」

高い声が前方から飛び交う。まだまだ幼いその声は教室の雑音とともに消えていく。

「おい、おいってば」

ざわめく教室には人の声やドタバタという足音・・・物を落とす音。色々な音が混じり合う。非常に賑やかなクラスだと思う。

「聞けよ、んったく」

頭をちょんちょんとされた。
もしかして今のはあたしに向かって必死で言ってたのか・・・？

「寝てた？目を開けたまま」
「え・・・？ぁ・・・いや」

そしてぽんと両手を叩いて、駿弥はあたしの頭に掌を押しつけた。

「わかった。お前が大人しい理由っ」
「・・・へ？」
「会話が成立しないんだよね」
「あ・・・はい・・・ごめんなさい」

何故かよくわからんが謝ってみる。すると「謝るな」と言われた。
あたしにそれを改善できる自身はさらさらないんだけど・・・弱ったな。

みんなぽつぽつと席に着きだした。あたしも授業モードＯＮ。
静かに、前を向く。

第四章

「おべんっとおべんと～♪」

相変わらずの朱はご機嫌さんである。
もうお昼。みんなは早々と箸を進めている。

「なんかさ、あずちゃんお弁当箱ちちゃくない！？」

そりゃあ・・・スポーツ部の朱にくらべて少ないのはわかる。
でもそんなに吃驚した目で見なくても・・・。
あなたが異常に多いだけでしょう。あたしが普通・・・だと思う。

「いやぁーこんくらいはないと夜お腹すくってぇー。」

よく見ればあたしのお弁当箱の１．５倍ほどの大きさのものを朱は頬張っている。
小食のつもりはない。まったく。
うごかないからエネルギーをそれほど求めないのだよ。きっとね・・・。

「ふぅーん・・・」

もぐもぐ・・・朱は再びお箸の運動に夢中になる。
だいたい食べ終わるのは１５分ほど。ギリギリラインである。

休み時間、３人で集まって色々と世間話をしていた。
窓辺は風があたって夏場でも少しはましになる。

「なんかさー、最近つまんないよねぇ」
「うーん・・・まぁ・・・」
「そう？蓮華はたぁーのしっ」

朱の持ち出した話題に必死になりついていく。
憂鬱なのはみんな同じなのかもしれない。あたしほどでもないだろうけど。
まぁ、大抵こう言うキャラクターとかって幼きころに大きなトラウマの穴が埋まらず鬱になるが、
あたしの場合そんなものない。まったく。

「あっついしさぁーこまるぅー」
「・・・そうだね」
「いやー、でもきっもちいいじゃんっ」

蓮華も朱も、まったく言ってる事が反対だね。
でもそんな二人だからこうして仲がいいのかもしれない。

「もー、さっきから反論ばっかし！」
「しょうがないじゃん。人それぞれ何だし」
「・・・主観」

でも、結局はこうしてギクシャクしだすのだ。
そのあと、何事もなかったかのように笑う二人は、仲がいいのか悪いのか・・・
喧嘩するほど仲がいいというけれど、それがこれなのかもしれない・・・。

「あー、えっと・・・あたし教科連絡に・・・」

「はいはーいっ」

あたしは小走りで階段を駆けた。
うちの学校は旧校舎と新校舎にわかれてるんだけど、職員室のある新校舎はかなり薄暗い。
日当たりが悪いのだと思う。この後者の眺めは・・・廊下はいまいち。
大きなマンションがどんとたっており、ほとんど綺麗なものは見えない。
人が棲んでいると云う存在感だけがあふれ出ている。

「失礼します・・・1年D組の中西です。教科連絡に・・・」

用を済ませたら階段を駆け上って行く。
何故か途中の保健室の前に、身長をはかるアレが置いてある。
誰もいない、静まり返った廊下にあたしだけが取り残されている。
寂しい道に立ち止まってなんとなく身長を測ってみる。高くなってないのは承知で。

・・・っとこんな事をしてる場合じゃなかった。
そろそろチャイムの鳴る時間が迫って切れるかもしれない。

第五章

戻ってみれば、教室はシンとしていた。
人気(ひとけ)のない静かな教室。誰もいないので、きっと教室には鍵がかかっているだろう。
そういえば5時間目は移動教室だったことをすっかり忘れていた。
みんな早々とあたしを置いていったらしい。
どうしよう、遅刻して怒られるのもいやだし・・・毎日のように襲ってくる頭痛が都合よく暴れているので、保健室で寝ておこうかな・・・などと考えていた。

ガチャン
物音がした。

ひょこりと顔を出したのは、駿弥の姿だった。
でも何故ここに・・・？
もうとっくに人はいないのかと思っていた。
薄い闇に包まれた教室に独りで・・・かくれんぼでもしていたのだろうか。

「もう、おっそ。待ちくたびれたじゃんか」
「え・・・？」

どうやら駿弥はあたしを態々（わざわざ）待ってくれていた様。
ここで見つかってはサボれなくてちょっと好都合ではないんだが・・・・・。

「せっかく人が待ってやってたのに何が好都合じゃないだ」
「ごめんなさい・・・というか授業おくれないの？」

「保健室行こう。俺がぶつかってどうのってことにしよっか」

駿弥は教室の鍵を閉めながら言った。
似たような事を考えていたのかぁ・・・・・・。
これで少しは時間稼ぎが出来るよね。
２人きりってのも少し胸が高鳴るかな。

「さっきぶつかって頭打った事にしようか・・・というかなんて理由つければいい？」
「頭関連を希望するぞ・・・」

相変わらずの頭痛持ちですから。
できるならばベッドで寝ていたい。でも、寝込むほどの痛みじゃない。
頭の上に猫でものっかってるかのよう・・・痛いというか違和感の方が強いかもしれない。

保健室の前に着くと、やっぱり人は行き来をしてはいない。
ほとんどの人は授業を真面目に受けてるからね・・・。
すれ違う時の先生の目線が恐ろしい。

「失礼します・・・えっと、この子ぶつかってしまいまして――」

保健室も静まり薄暗い。
もう、しょうがないわねと先生が頭を見てくれる。
どこらへんをぶつけたの？と聞かれちょっと焦った。とりあえず左側をぶつけた事にしておいた。
頭を左右に振られるもんで、内側がグワングワンとする・・・。
そして動きをやめるとジンジンする・・・。もうちょっと丁寧にあつかってほしい。

「あ、新田くんはもういいから。授業行ってらっしゃい？」
先生は優しくそう言った。
新田（にいだ）とは駿弥の苗字。
「でわ・・・」とするする退室した駿弥。
なんだか急に気まずくなってきた・・・。

「うーん、大丈夫そうね。氷でもいる？」
「いえ・・・結構です」

頭を冷やしては余計に頭が痛みだす様な気がして断った。
あたしもペコペコと頭を下げて扉を閉める。
今日は一段と頭が重たいかな・・・。

「わっ！」
「・・・！？」

曲がり角で出てきたのは駿弥である。吃驚した。

「バレなかった？よね・・・今頃俺も呼ばれてるだろうから」

もしかして待っていてくれたのかと思うとなんだか急に暑くなってきた。

「いやぁ・・・ちょっと気になってさ」
「何が・・・？」
「さっき苦しそうな顔してたけど、もしかしてほんとに頭痛かったり？」
「え・・・いやぁ・・・別に」

なんだか我ながらぎこちない喋り方だと思う。
駿弥はあたしに合わせてゆっくり前方へ歩いて行ってくれてるようだ。
移動教室・・・たしか使われていない元1年生の教室だったかな。

「なんかややこしいことになりそうだよなっ。俺が何とかするけどさ」
「お願いします」
「全部誰にも言うなよ。お願いだから」
「はい」

つくづく思っていたが、あたしってなんか誰にでも敬語を使えると云う技があるのかもしれない。
好きな人だから敬語ってわけじゃないと思う。
なんだかこういうシチュエーションは久しぶりな気がして・・・とても懐かしく思う。

そしてここは1年F組という名称の教室である。
駿弥が先に足を踏み入れた。

「おくれてすみませんでした」

駿弥の後ろであたしも一緒になって頭を下げる。
教室のみんなの目がとても恐い・・・恐ろしい。
英語の教師が吃驚した顔でこちらを凝視しているのが頭のてっぺんから解る。

「あのー・・・中西さんとぶつかりまして、それで――――」

さっきの出来事を誰にも聞こえぬように話してくれている。
なんだかこの場を逃げ出したくなるね。
教室にもとても入りづらい。視線は皆駿弥と教師の方を的としてるけれど。

「そうでしたか。御苦労さまでした。さ、中西さんも入ってください。でわ・・・続きはですね、えーっと――」

授業を再開し始めた。スタスタと足音を立てずにあたしは席に着いた。
砕けるような視線が2人を貫く。
そう感じるのはあたしと駿弥が前後の席同士だから・・・。

「ねぇねぇ、何があったの？」

朱があたしの肩を叩いていってくる。
この空気でそんな話をしては結局教師に怒られるかなと思ったので、また後で事情は話すとしておいた。
冷めた空気の中、あたしはなるべく気持ちを縮めて授業を受けていた。

第六章

授業が終わって、朱には本当の事を話してみた。
嘘ついたってしょうがないしね。朱は漏らすなといった機密情報をどこにでもばらまいたりはしない。
というか、そんなことなら最初からすみませんおくれましたと言ってもよかったかもしれない。
数分後に朱は「ふうん」と頷いてくれた。
でもこれを蓮華に告げるとどうなるか予想は出来ないので第三者には内緒。朱だけと言っておいた。

「なぁーんだ。ってっきり2人は出来てるのかと思ったぁ」

出来てる・・・？何のことだろう。

「うんぬふふっ・・・まぁ、いつかわかるんじゃないっ！？」

誤魔化された気分でいた。まぁ別にいいのだけれど。
さっきからだけど、だんだん睡魔があたしをおそいだした。
目がしょぼしょぼするし、頭がボーッとして何も考えられない。
次の時間は数学だと云うのに・・・。

いくらもがいたって時は刻々と過ぎていく。
時が止まるようなことは現代ではありえない。
だからいくら逃げたくたって時間は待ってくれないし、逆に迫ってくるのだ。
そんなのとっくに解りきっているが、どうしても数学の時間だけは

来てほしくない。
いつもの憂鬱モードが学校に来るだけでも2倍となるのに数学だと通常の4倍だ。
なんでかは知らないけどだんだん教師の声が耳に届きにくくなってきた。
困ったなぁ・・・テストの時に勉強量がいっそう増えるじゃないか。

「えー・・・え、え、え・・・」

急に教師は話をやめた。
どうしたことやら・・・。

「あれ・・・？ん・・・」

次の瞬間、教師の姿が蝋燭（ろうそく）についた火のようにねじれながら消えた。
何が起こった・・・！？

するとあたしの周りに座る生徒たちも次々にねじれていく。
いったいどうなった・・・。
ほとんど空になった教室で、あたしとたった一人だけ残された人物がいた。

「あれっ…？みんなどこ行ったのかなっ」

キャピキャピとしていながらも落ち着いた低めの声。
蓮華である・・・。でもどうして・・・。
するとさっきは消えて言った人形（ヒトガタ）だったが、だんだん再び形を造って行く。
でも、さっき消えた人物とはまた別の少女の頭が出来上がった。

「あれ・・・ここは？」

少女の名は桃子（とうこ）。ボブヘアーで前髪を真ん中から綺麗に分けた少女で、

幼きころからの友達・・・つまりは蓮華と同様で幼馴染である。

桃子ちゃんも動揺してキョロキョロしている。そりゃそうだろう。

自分の学級でもないクラスへと飛ばされて堂々と立っている人形は見た事がない。

「あ、あずちゃん・・・れんー・・・ここは・・・？」

「蓮華たちの教室よっなんで桃子ちゃんがここに？」

それぞれに顔を見合わせては自分の居場所を再確認する。

あたしが足を置いている床はまぎれもなく我等の教室である・・・・・・。

「わっ・・・！」

再び人影が渦を巻きうにうにと出てきた。

シルエット的に・・・きっと――

「たい・・・！？」

そう発したのは蓮華。

やっぱり・・・太一（たいち）・・・。

これまたさきほどの方々同様、太一も幼馴染のひとり。

昔は大人しくて細みだったのに・・・どうしてこうなった。

「あれ、ここは・・・？」

桃子ちゃんと同じような台詞を発する。
すでに変わった低い声が、殺風景な教室に響き渡った。
本当に何が怒っているのか誰も解らないのか・・・。
この状況下で一番落ち着いていたのは間違いなくあたしだろう。
みんな焦ってあわあわ言っていたが、このあたしだけは――黙り込んでいたから・・・。

それは色々と考えていたからで、言葉を失ったわけではない。
こんなことが現実に起こりうると思いますか・・・？
人々が消え、そして数名がまた出てくる。
何かがおかしい。文字だけ読んでもこの状況はきっと理解できない。

第七章

ぼんやりと立ちつくすあたしと、
きょろきょろしていた桃子ちゃん。
何かを求めうろうろする太一。
一番先に動いたのは蓮華だった。

「ちょっと行ってくるっ！」

ドタドタと勢いよく教室を飛び出して廊下を駆けていく。
その静かな足音だけが耳を心地よく刺激していた。

「あーとうこもぉー・・・」

ゆるゆるとしながら桃子ちゃんも夢中で追いかける。
蓮華様は美しいが、桃子ちゃんはなんというか・・・。
名前からは想像できないでしょうが、スポーティーな匂いが漂っています。

教室に残されたあたしと太一はとりあえず椅子に腰をかけた。
深くドンと座り、太一は机にぺたりと頬をくっつけた。
突然の出来事に動揺を隠しきれないのか足がしきりに動いている。
貧乏ゆすりにしては寒さが足りないかな。

「なぁ、これって何なの？俺の夢なの・・・？」

とうとう耐えきれなくなったのだろう。
太一は立ち上がりこちらへ移動してくる。
落ち着かないのはよくわかる。

「解らない。でも、その夢をあたしが見ているのは確か」
足音がバタドタドタバタ・・・近づいてくるのが解る気がする。
「でも俺の中の夢のお前がそう言うだけだとしたら・・・？」
「なんか・・・何て言ってるのか理解できん」

「みんな消えてるっ！1人もこの校舎に人はいないよぉっ！！」
「え、レンン・・・とうこたち居るんだけど・・・」
「あー、蓮華たち以外ねっ」

どうやら2人はこの校舎を走り回って誰か人はいないか探していてくれたらしい。
それにしては早いような・・・。

「だって今日、2年生はいないでしょっ。だからだよっ」
「うんうんんー」

とりあえず人がいないのは解った。
たしかに教室の窓から見ても人間は歩いていない。
なんだかおもちゃのまちに閉じ込められたようだ。
・・・って、閉じ込められては無いよね。
人がいない割には普通に地球は回ってるな・・・。

「はいっ、細かい事は気にしないっ・・・！」
「それはいいんだけど、どうする気ですか・・・？」

蓮華にあたしが言う。だってそうでしょ？
人がいないとわかったところでどうするのか。

それだけで消えた人間が戻ってきたら楽なんだけどさ。

何故か知らないけど身体が揺れている。何故・・・？
その揺れも一層強くなってきた・・・。何なんだこの感覚は・・・。

『・・・きてる？　おいってば　ねぇ・・・』

大きな声が耳元をこだまする・・・が、声の主はここにいるあたしを含む４人でない事は確か。
さっきの声は・・・誰の声？
思い出せない。聞き覚えは十分にあるのだけれど。

「どうしたの？あずちゃん」

蓮華が不思議そうにこちらを見ている。
さっきの声が聞こえなかったのか・・・。

「いやぁ、なんでもない」

一応そう言っておこう。
するとぐにゅぐにゅっとした感触が頬をおそう。
今度は何・・・？

「え・・・ちょ・・・えぇぇ・・・あずちゃん・・・？？お――いっ・・・」

蓮華の声が薄れていく・・・その声はだんだんと・・・消えていく。

第八章

「大丈夫・・・？ねぇっ」

大きな声を上げているに違いない・・・目玉が下へ動いていくのがよくわかる。

ぐるりんじゃなくてじりじりと・・・。

「ちょっと・・・だめだってっ・・・ぁ・・・ぁ」

その声と重なってきたのは――――

「起きてる――？いい加減に起きろってばもー」

「あぅっ・・・！？」

さっきまで蓮華が目の前に居たはずなのに・・・こんどは駿弥に代わっていた。

みんな鞄を机上にあげている・・・こんどはいったいどうしたと云うのか・・・。

「何言ってんの？バァーカ。　ボーッとしてたから起こしてやったのに」

よく見てみれば駿弥の右手はあたしの頬へと延びていた。

寝ていた・・・？あたしが・・・？

「いやぁ、寝ていたと云うか・・・なんかどこ見てるか解んなかったからさぁ、たしかにいつもあずはボーッとしてるけど今日は中々降りてこなかったよ」

え・・・そんな・・・たぶん教師が噛んだところからかな・・・。
じゃあさっきのは太一の言う通り、夢だったのかな・・・。

「夢ってことは寝てたんだなっ」
「いやぁ・・・白昼夢」
「ひゃ・・・ひゃくつーむ？」
「はくちゅうむ」

はくちゅうむってのはねぇ・・・じゃなかった。
さっきの声はきっと起こそうとしてたからかな・・・。
それと頬の違和感はあたしの頬をつねっていたから・・・？

「何だそれ、どう書くの？」
「白いに・・・昼に夢・・・だった気がする」
「あっそう。どうでもいいけどさ、なかなか喋らないで固まってたから荷物鞄につめてやったよ」
「あ・・・ありがとう」

これは手間が減るね・・・というか、もう授業終わってたんだ。
不思議な感じだ。あんなに色々・・・はっきり覚えてるのに夢なんて・・・気持ち悪い。

「でさぁ、このノートなんだけどさぁ・・・」
「あっ・・・それは・・・！」

駿弥が左手で持っていたのはあたしの自由帳・・・あれ？どっから・・・？

「鞄の一番奥に入れてたろっ。中味ぜぇ～んぶ見てやったもんねっ

☆」
「えぇー・・・だめだよ」
ケラケラと駿弥は笑って楽しんでいるが、あたしはちっとも楽しくないぞ。
「なんかさ、あずって絵うまいんだねー。ってか昔から知ってたけど絵上手くなった」
「・・・駿弥に見せた記憶はまったくないのですが・・・」
「いちいちそんなん覚えてんの？朱とか見せたことある？」
覚えてるかと聞かれたら・・・そりゃあ覚えてない人もいるさ。
でも、駿弥は覚えてる。無い絶対。
朱も覚えてるよちゃんと。何回かはあるかな・・・。
なんとかノートを取り返すと、すぐに担任の先生が教室へやってきた。
なんか、今日はおかしな一日だったけれど・・・とても楽しかった。

第八章（後書き）

すいません。”第八話”になってましたねｗｗ
編集しました。

JPYEUX

今日はちょっと心がはずんでいるのだ。
誰だって、アラフォーの時期じゃなけりゃちょっとくらいは興奮するはずのこの日。
朝起きたら、弟だけがその祝福の一言を告げてくれた。
親はきっと夜になってからだろうと思う。
待ち合わせの場所にも早く着いた。だって今日は特別だからそれなりに早起きをしたのだ。
自らの力で7時ぴったりに起きるなんて・・・自分でもどうしたのかと思うくらいだ。

「あ、あずちゃんっ！おめでとーっ」

友達の中で一番最初にその言葉をくれたのは蓮華だった。
今日も一段と黒いポニーテールが輝いて見える。

「今日プレゼントもってくかんねっ！まってるんだよっ」
「解った。ありがとう」

結構ピークに近い興奮だったんだけど・・・。
こんなことを言われた。

「もー、せっかくの日なのにそんな暗い気分でいないでさっ、もっとプァァァ――――っとなっちゃいなよ」

たしかに最近テンションが常に低いのは自覚してる。
なんだか疲れるんだもの。体力がついていかないって。

「あ、あけみんだ」

朱はいつのまにそんなあだ名を・・・。
とりあえずむこうのほうから朱が寄ってくるのが分かる。
まだ冷たい風があたしたちの頬をゆっくりとつついてくる。
正直そろそろ温かくなってほしいと思ってる。衣替えには厳しい気温。

「あっけみ――ん！今日ね、あずちゃんね――――」
「あっ、そっかぁ。おめでとー」
「うん・・・ありがとー」

少し身体の奥がぽわぽわするね。
でもそんなに親しい友人がいるわけでもないので、このくらいでもう終わってしまうのだ。
あとは学校に行けば会える友達もいるが・・・覚えてもらえない人もいる。

「じゃ、しゅっぱつっ！」

重たい鞄をむりやり肩にかけてやって、みんなで移動。
学校が近いだけよかったし、助かる。
他の生徒たちも次々と校門に吸い込まれて行く。

「あ、桃子ちゃんじゃんっ！」

蓮華は荷物の重さなど気にしないかのように駆けていった。
桃子ちゃんはいつものようにくねくねとしながらこちらへ来る。

「あずちゃんおめでとー」

すべての台詞が桃子ちゃんは棒読みである。
これも一つの萌え要素として蓮華様は気にいってるらしいが・・・。
あたしは2次元のが・・・いや、何でもない。

「なんかもう抜かれたってのがやだなー。やっと並んだと思ったのにー」

ははは・・・逆にいえば早くあたしは抜きたかったさ。
この時期のせいで貴女たちにはチビ扱いをされるハメになってますがね・・・。

校舎の階段を上る。みんな楽しそうに会話を交わしているが、そんな余裕はまったくない。
荷物が重たすぎて息が苦しい。どうして1年は最上階なのだ・・・？
まぁそれはいいとして・・・桃子ちゃんとは教室まで分かれた。
違うクラスだからね。朱と蓮華とあたしは背の高い順で教室に入った。
みんなそこまで身長差は無いのだが、蓮華に比べて若干朱が小さいしほとんど大差は無いが朱の方があたしより大きい。
これは他の2名が大きいだけであってあたしは平均的な身長のつもりなのである。
（実際ちょうど一歳年下の平均身長だということは内緒である）
原因はきっと夜中まで起きてるからというのはよくわかっている。
運動をしないのも。

「あ・・・あずちゃん・・・おめでとうっ」

あまりクラスでも接点の無かった菜々美（ななみ）さんが話しかけてきた。
あたしは・・・菜々美さんにおしえた覚えは無いんだが・・・。

「えっとぉ・・・あずちゃんプロフィールにかいてくれてたでしょ？」
「あ、そっか。そうでした。ありがとうございます」
何故だか知らないけど――堅苦しいと自分でも思うが接点の無い奴にはほとんど敬語で話す。
というか、自分から人によってかないので話す事もまずないが。
それだけを告げると菜々美さんは教室の外へと姿を消していった。
なんだったんだろう・・・あれは。

「ねぇ、おめでとうって何？」
「ぅわっ・・・！」

まったく気付かなかったが、前方の席には当たり前のように駿弥様がすわっておられた。
きゅうに顔を出してきたもんで、かなりの動揺・・・唯でさえ焦るのにね。
でも中々自分では・・・

「えっ、知らないのっ！？今日はあずちゃんの誕生日なのにっ」
これまたひょこひょこと顔を出してきたのは自慢の髪をゆらゆらさせ、駿弥の顔の前に人差し指を突きたてた蓮華だった。
「え・・・あ・・・何？そうなんだ。とりあえずおめでとう。なんかいる？」
「いや・・・いらないです」
引き出しの中をごそごそとしているが・・・いらない。

駿弥の机から何がでてくるか・・・考えるだけで恐ろしいと思うのはあたしだけ？
すると蓮華がぽんと駿弥の肩を叩いて・・・
「あんたは何もあげなくていいのっ蓮華がちゃんとプレゼント用意してるんだからっ！
1番すごいのを蓮華がプレゼントするのにライバル増えちゃたまんないってば」
そう言って駿弥の頭をグーで叩いていた。
「ひぃ」とかいう悲鳴もあげていた。
じゃあ蓮華のプレゼントには期待かなぁ。
「いやぁ――でもって大したことはないんだけどねっ。でも、あずちゃんに似合うように
選んだ自身はかなりあるからねっ。大事にしてよ～」
「うん」
その会話を、そとからずっと眺めている誰かの視線があたしの後頭部に直撃しているのがよくわかった。
でも振り向けば・・・お互い凝視し合う事になってしまう。
そんなの気不味いので、何も知らんかったふりをして蓮華と笑い合っていた。
そして時間は過ぎて昼休みの時間。
先生に用があって、校舎中を走り回っていた。
職員室に居ないと云われてはあの先生の居る場所なんて想像もつかない。

やっぱり先生は見つからず、時間は過ぎてぬるぬると退散するしかなかった・・・。

そして再び先生探しをしたのは掃除時間。
これまた職員室にはいらっしゃらないと聞いた。
いろんな先生や通りすがりの知り合いにも聴いたが・・・みんな知らないと云う。
こんなに忙しそうにあたしが廊下を走っていたら気持ち悪いのはよくわかる。

「・・・何やってんの？」
「えっ・・・先生に用事があって」

振り向くと駿弥が不思議そうにこちらを見ていた。
薄暗いこの校舎、人間はほとんど必死に掃除をしていたと云うのに・・・。

「さっきからずっと探してんでしょ？」
「ぁ・・・知ってたんだ」

どこからそんな情報を持ち出したのかよくわからない。

「太一があずが頑張って校舎をあばれまわってるって聞いてさ。キャラに合わないなーと思って」
「・・・そう」

ざわめく生徒の声が頭上から降り注ぐ。
上の階ではせっせと掃除が行われているのだろう。
休み時間と並ぶくらい騒がしい時間。それが掃除時間。

「みつからないんだろ。手伝ってやろうか・・・？」
「え・・・」
駿弥にしては気が利きすぎてる・・・しなんか不気味で気持ち悪い。
いったい何があったのか。
「いや、何もないけど・・・なっ、なんか今日誕生日なんだろ？
だったら今日の主役は少しくらい楽してくれたって・・・」
「あー・・・そう・・・そうなんだ」
なんだか無理矢理理由をつけてやった。みたいな言い方だった。
確かに今日の主役はもっとのんびりと過ごしたいものです。
そんな理由はもう通じない。
「でっ・・・国語の先生探すんだろ？」
「うん」
痛いと云うほどぎゅーっと手首をつかまれた。
こんなに力強かったのかな・・・？この前手を握ってもらったとき
はこんなに・・・。まぁいいや
かなりのスピードで階段を上って行く・・・これじゃいつかこけそ
うなんですけど。
「あの先生、４階をよくうろついてるらしいからさ」
「あのー・・・もうちょっとゆっくり・・・」
「やだ」
ちょっと息が切れかけ、足も若干痛むが、無事に４階についた。
この階はわりと静か。ふたりの足音がしんしんと響き渡る。

「いないのか・・・？」
「あのぉ・・・そろそろ手を」
「・・・」

なんだかとても恥ずかしいし話せる空気にならない・・・。
せめて今握っている右手だけでも離してもらいたいんだけど・・・。
どうやら聞こえなかったらしい。
でももう一度言う勇気は無い。
そのまま走っている。あんまり頑張りすぎると怒られる気がするんだけどなぁ・・・。

「あ、いた！」
「あ・・・ほんとだ」

その女教師は書類を両手に抱え上げて歩いている。
間違いなく国語の先生だと認識できる。
廊下に響く足音に先生が振り返った。

「先生、えっと・・・これを・・・」

用を済ませ終わると元のスピードで還って行く。
先生と話をしている間も駿弥があたしの手を離すことは無かった。
階段を下りるのはちょっと恐い・・・このスピードじゃ・・・

「あっ・・・！」
「うわぁっ・・・」

案の定、転びました・・・。
もうちょっと自重してスピードを落としてください。

「ごめん、俺引っ張りすぎたか・・・な」
「・・・」
手を握ってくれていたおかげで顔面からの衝突はまのがれた・・・
と思う。

「ごめん、大丈夫・・・？ごめん」
「あ・・・いや、大丈夫」

よいしょっと・・・立ち上がるとじゃっかん膝の皮がむけていた。
ヒリヒリするがそれほどの怪我ではない。

「ごめん・・・ほんっとに大丈夫か？なんなら保健室に・・・」
「保健室・・・御決まりなんだな」

いやぁ・・・痛かった。
なんだか細い針でチクチク刺されてるみたいだ。
でも少し心配してもらえたっていうのが、なんとなく嬉しかったかな。

「今度はゆっくり行くから、ごめんよ」
「いいよいいよ」

あの日よりは優しくぎゅっと右手を握ってくれた。
だんだん生徒のざわめきも静まってきたのはそろそろ掃除は終わりだというあいずだとおもってる。
でも、やっぱり手を握られるのは・・・胸が飛び出そうになるくらいに恥ずかしい。

「このことは内緒だからなっ、誰にも。」

「どうして・・・・？」
「なっ・・・なんとなくだって。あの後、すっごく俺ややこしいことになったんだからなっ」

あの後というのは、きっと先日の授業に遅れたときに
なんとか怒られずに済んだ件だと察した。
あたしだって朱に問い詰められたいい気分ではなかったさ。半分はね。

それにしては今日、駿弥がやけにてをにぎってくるのは何故だろう・・・。
これもまた白昼夢だったりして・・・恐いなぁ。
ということはまたみんなあたしを置いてホームルームとかって・・・。

「また夢でも見てんのか？んなわけねーよっ」

教室が迫ってくる。
するとさっきまできつかった駿弥の手がパッと離れた。
さすがに教室の中までは恥ずかしいよね。

何事もなかったかのように教室の時間は回っていたけど、家に帰るまであたしの脳みそは真っ赤だったと思う。
なんだか、この歳はいい歳になりそうな予感がしてたまらなかった・・・。
もう少しだけ、もう少しだけ・・・この学校の校舎が広かったらよかったのに。
そう思ったのはこれが初めてかもしれない。

ＪＰＹＥＵＸ　（後書き）

私が今日、たまたま誕生日だったので書かせていただきました。
あまり話は分けたくなかったので続けて描いてみましたが長くなっちゃいましたね・・・。
最後はもうやっつけって感じです。ごめんなさい。

誕生日の日に、好きな人と良い雰囲気になれたらやっぱり嬉しいですよね。

第十章

ほんのこの前まであたしはこの生活をダルいものだと感じていた。
もちろん、今でもダルい。ものすんごく。
でも、ダルいけどこの生活ではないと出来ない事ってのもあるんだよね。
それが大分解ってきた。それは今がこのまえよりもあたたかいものだからだと思う。
でも、あたしはできればこのままではなくて・・・求めているのも確か。
そんな事、口に出したことなんて一度もないのだけれどね。

「よーおっ」
「お早うございます」
「敬語なんか堅苦しいなぁ～・・・お姉ちゃん」
「・・・ごめんなさい駿弥ちゃん」
「なんなのそれ・・・きもちわるっ」

聞き慣れた声があたしの顔の前で流れていく。
なんだか最近妙に絡んでくるよね、駿弥って。
小学生の頃でもこんなにひんぱんに話してたのって隣の席になるくらいだったと思う。

「別にいーじゃんか・・・そんなに絡まれたくない？」
「いや・・・・・そんなんじゃないけど、なんか変わったなって」
ここで「絡んでくるな馬鹿っ！」なんて顔を赤らめていうと可愛いんだろうなぁ。とか思いながら
あくまで素直に答える。どうしても偽るのは上手く慣れないのでね。

「誰が？・・・俺っ！？」
「そうだけど」
そろそろ時計の針も８時３０分に追いつく準備を始めたみたい。
教室中の人間がいっせいに席に着こうとするせいで、机やいすの動く音が絶えない。
あと少しはこうしてのんびり話していられる。
「どこがだよ。変わったのはお前の方だろ・・・？」
「えっ・・・」
あたしが変わった・・・？
「入学したばっかの時はさ、お前・・・黙り込んで人形みたいで話しかけづらかったけどさ・・・
最近前までのあずにもどった気がするんだ。なんとなくだけど・・・良くなった」
「何が良いって・・・？」
「具体的には・・・言いにくい。というか今の俺には・・・」
どうやらあたしはこの会話の間、ずっと駿弥の目を凝視していたらしい。
目を金魚よりもすさまじく泳がせていた駿弥は一瞬こちらを見ると、ふいっと顔ごと下に向けた。
あわててあたしも目をそらしてみる。なんか嫌に思われたら恐いし
「ん、んん・・・ごめん、説明がつかないや。勘弁・・・」
「はい・・・」

その続きの言葉を聞きたかった。
何か期待をしているわけではない。まったくとは言えないけれど・・・。
唯あたし自信、どこか変わった実感がまるでない。
人に言われてじゃないと自分を見れないってのが問題なんだけどいちいち自己を気にしてちゃ歩いてはいけない・・・気がする。

「あー・・・んと、そういえばあの漫画の続き見してよ」
「あの漫画ってどれの事・・・？」
「例のあれだよ・・・なんかこの前ＤＶＤが発売されてどーとかＣＭが・・・」
「あーうん」

「先生きたっ！」とどこかの誰かが発したとたん。皆は机やいすを綺麗にきっちり並べなおした。
乱れたものを目撃すると注意されるかもわからないからね。

「えーと明日・・・ん、あ？やばい先生だってさ！」

くるりと回ると駿弥は背を向けて慌てて読書の本を探し出す。
あたし？あたしは本を机上に装備しておいたので何も問題はない。
適当にページを開いて熱心に読んでいるふりをする。
頬杖をつかないと首が重くて痛くなるんだよね・・・。
読書って嫌いだ。文字見てると眠いし・・・そろそろ所有している本も尽きる。
新しい本は、なるべく表紙の絵が綺麗なものにしようかなぁ・・・。

第十一章

1時間目が目前に迫ったこの休み時間・・・。
ほとんどの生徒は自分の領域にこもって廊下へ躍り出たりはしない。
限られたスペースの中で、男の子という生き物は大暴れしているわけなんだが・・・

「でさ、漫画の話よ。明日じゃなくてー・・・今日でもいいけど。俺の家持ってきてよ」
「え・・・駿弥の家!?」

ちょっと大きな声を出しすぎたと思う。此処(がっこう)では大分大人しいキャラのあたしがこんな声を上げるとは・・・。
でもみんなそれに気付いていないようだった。

「うんー。取りに行ってもいいよ?あー、でも持って帰るの面倒だし、持ってきてよ」
「雑用係ですか・・・?」

うれしい半面、雑務を押しつけられるとは・・・。
返す時くらいちゃんと届けてくれるのかな?なんてね・・・。
そんな事を言っていると、今日も相変わらず馬鹿なオーラを振りまいている朱がやってきた。

「ねぇー、何の話ぃー?」
「あー、こいつに漫画持ってこいって言ってんの。あの漫画すっごい面白かったし」
「漫画ー?重いよ、それは・・・いいことおもいついたっ!」

朝から一時間目分のエネルギーをよく使いきるなぁと思う。
平日は憂鬱気味で沈んでいるのに・・・他人(ひと)はこんなに違うなんて。
そう、夜中はまれに鬱だけどエンジンがかかるのは寝る直前なんだけどな・・・。何故だろう。

「今日は漫画大会やろぉっ?えっとー、会場は駿弥の家！か・・・あずちゃんの家」
「あ、ごめん、あたしの家今日親いないから無理」

あたしの両親は共働きだから。
でもそんなに大変ではない。母親は夕方には帰るから晩御飯なんて作らなくても出てくる。
父親は日付の変わる前くらいかな・・・。

「俺んとこも。妹風邪ひいてるから」
「じゃあ、どうしてあずちゃんに持って来いってぇー・・・」
「いや・・・玄関前なら問題ないと思う」
「ふぅーん・・・そういうことだったんだー・・・なぁーんだ」

すとんと肩を落として、朱はくるりと半回転してこちらを向き、また半回転で戻った。

「しょーがないっ・・・それならばー・・・朱の家でやる?漫画読むの」
「部活大丈夫なのかな・・・？2人とも」
「俺はいける今日くらい休んだって大丈夫だろうよ」

なんだかあっさり今日の予定は決まってしまった。
どうしてかな・・・本当は駿弥の家に漫画を持っていくだけだったのに。

漫画を皆で持ち寄って読むことになってしまった。
もう中学生なんだし、遊ぶ時間もまともにない・・・。
というか、みんな勉強しないのかな（あたしはやる気もないけれど。）

「うんっ。じゃあ、各自朱の家集合ねぇー。あぁ、そうそう・・・別にふたり一緒に来なくたっていいのぉ。別々でも構わないからぁ・・・」
「一緒に来てほしくないのか・・・？」
「んー・・・んふふっ。なんか今から楽しみだなぁ～」

あたしは駿弥の顔を見た。意外と普通だ・・・。
だけど今のは誤魔化しに違いない。きっと何かあるのだ。そんなカンがなんとなく浮かんだ。

第十二章

「んしょと・・・」

重たいので、両手で抱えて家を出る。
よく考えたら、これじゃ扉の鍵が閉めれないじゃないか。
というわけで一度下に荷物を置く。鍵を家の中に忘れた。

「あ・・・うんっと・・・」

扉があかない。当たり前だ。扉の前には重たい漫画の山の詰められた袋が堂々とそびえたっているから。
無理矢理足でぐいぐい押して、なんとか扉の前から移動させると靴も脱がずに膝だけを使って鍵を取りに行った。
タイムロス？そんなものは気にしない。

「いってきまぁす！」

重くて走れない・・・まったくだ。
あまりにもそれは持って行きすぎじゃないかって？いやいや。
だって駿弥はこの漫画、読むの早いし。駿弥が希望した漫画は少年向けだから朱が・・・ってことで女の子向けのも3冊ほど詰めてきたのさっ。

信号待ちはあたしの腕を縛りあげる。
止まっているとよけいに荷物の重さを感じるのだ。
そんなことをいくらほざいたって居るかもわからない天のお父様は車をなくしたりはしない。
あれ・・・でもこれじゃあたしがキリスト教信者みたいじゃないか。

一応仏教の人なんですけどね。

朱の家は一軒家。2階建。
家に入れば、幼い妹たちがお出迎えしてくれた。

「わー、あずちゃんあずちゃん！いらっしゃーい」
「いらしゃーい」

小学校低学年の娘と、大体3歳くらいの女の子。
2人とも若干朱に似ているような気がする。

「え・・・あ・・・ごめ・・・・・・き・・まっ・・・・」

扉の奥から、朱の声が聞こえる。
小さすぎてなんていってるかはよく聞き取れない。
すると扉ががちゃりと開いた。

「いらっしゃーい。あ、もう駿弥もきてるよぉ」
「おじゃまします」

綺麗に片付いた部屋。落ち着いた壁の色。
そして可愛くて愛らしい小物達。
そのちょうど真ん中に駿弥は座っていた。にあってねぇ。

「・・・・・・」

黙って静かな空気である。
昔からの悪い癖で、こういう空気の時笑みがこぼれてしまう。
普段なかなか笑わないのにこう言うときだけ噴き出してしまう。小さいころからそうだった。

朱は身体をゆーらゆらとさせている。若干にょこにょこと動いているみたい。
それに合わせるかのように駿弥まで動いている。

「あー・・・で、あずあの漫画持ってきたんだろ？貸して」
「はい・・・5巻からでいいんだよねっ・・・？」
「2人で手を取り合ったところから・・・だったと思う。そうそう、表紙はこれだった」

駿弥は逃げるようにしてあたしの隣に座る。
何があったのだろう。喧嘩でもしたのかなーなんて思いながら・・・。
でも、ちょっと寄りすぎな気がする・・・。
もう耐えられなくて、ちょっとだけ左へ移動する。そしたらその行く手には・・・

「あー、朱もっ・・・かか、貸してもらうねぇ・・・」

やっぱり何かあったに違いない。
これは失礼だよなぁ。退散しようかなぁとあたしは思った。
というわけでちょっと退室させていただく。

「ごめん、ちょっとトイレ借りていいですか・・・？」
「はいぃー。どうぞぉー」

とりあえず違う部屋へと移動した。
生ぬるい廊下。扉に耳を当てていたが、やっぱりそう聞こえてくるもんじゃないね。

「ごめ・・・い・・・なら・・ん・・・よ・・・ら・・・・き」

ごめいな・・・なんだっけ・・・？
やっぱり扉越しではこれが限界かな。
でも、声の感じからして喧嘩ではなさそう。
何かもめごとでもあったのかなと心配はしていたけど・・・よかったよかった。
せっかくなので、お手洗いも借りて部屋に再び突入してやった。

第十三章

「ふあっ・・・・!?えとー・・・おもしろいよねっへへん」

朱は頑張って誤魔化しているのだろう。でも見え見え。
なんでこんなに解りやすいのかな。定番だけど、漫画がさかさまになっている。

「さかさまにしたら新しい発見があるんだよぉー」

「・・・・・・」

冷めた。やっぱり今の空気じゃ無理。時間の問題・・・いつかは吹きだす。

「駿弥・・・大丈夫?」

「え・・・あっ・・・何・・・・!?」

いつもはひょこひょこ顔を出してくるくせに、どうしてだか駿弥もおかしい。いつもと違う。
あたしの知らないところでいったい何がおこっていたのか・・・・?

「ごめ・・・俺・・・無理だ。今日は帰る」

「えそんな、待って・・・1人で帰るの?」

「・・・うん」

「そっか」

駿弥は暗い顔のままうつむいて――部屋を出ていった。
なんだか急に胸が苦しくなった。あたしも一緒に帰ればよかったかなぁとか。

好きな人の事を知ろうとはおもうけど、努力なんてしてなかったなとか。
結局あたしがここにいることは駿弥にとって関係ないんだろうなとか・・・。

「・・・どうしたんだろうね」
「そ、そうだね・・・知らないっ。さ、続き見るねぇーっ」

なんだか寂しいなぁって久しぶりに思った。
今までずっと近くに居たけど、もう一度あんな風になる日が来るのかなぁって。
明日はなんとなく話せない気がしてきたよ。あたし、カンとかそういうのあんまりあてにならない人間だけど。

「駿弥となんかあったの・・・？」

触れない方が良かったかもしれない。
だけど気になって仕方がなかった。

「んー、特に何も・・・忙しいってねぇ」
「そうなんだ・・・」

いや、そんなことですむはずはない。
あの動きは異常だった。この数年の付き合いの中から考えて。

「お邪魔しました」

結局、何も聞き出せなかった。まぁ、部外者が知るようなことでもないだろうけれど・・・。

知りたくなるのは普通だよね・・・。いつも笑ってくれる人が暗いなんて。
家を出る前に解ったんだ。何か自分腕に足りないものがあることを。

「あっ・・・・・明日でいいかな」

また元通りに戻っていたらね・・・。
そしたら、問い詰めてやるんだ。さっきのことも。盗まれたものも。

第十四章

「やっぱり・・・」

意外とあいつはけろりとしていた。
昨日のことなんて寝たら終わり・・・？
あの様子からしたらもしかして何日間かひきずるかと思っていたけど、少し安心した。
おちこんで沈みきっている駿弥なんて気味が悪い。

「何がやっぱりだよ・・・。なぁーんか俺の事解りきった感じ」
「いや、解りきれてないけどさ」

やっぱりいつもの駿弥かもしれない。よかった。そう思う。
でも少し顔が違った気がするんだ。ほんの少しだけ・・・青色に染まったような気がする。

「人は完全に解り合えないって言いたいんだろ？あの漫画にかいてあったよー。」
「あ、そうだ」

あたしはヒュンと駿弥の顔の前でてのひらをむける。だってそうでしょ？
昨日盗まれたものを返してもらっていない。

「なんなのその手・・・」
「昨日漫画盗んだでしょ？返してください」

ごそごそと駿弥は鞄の中を探してくれている。

還る時にかなり荷物が減っていてびっくりした。
借りるならそう言ってくれれば連帯金無料で1週間ほどサービスしてあげたのに。

「ごっめん。漫画は家にある。んじゃ、今度その無料サービスでかりよっかな」
「はい・・・。で、えっとこの前何か言いかけて終わったよね・・・？」
「この前・・・？いつの事だそれ」

たしか昨日、あたしが変わったと変わってないとか・・・。
漫画の話題になる少し前の事だったと思う。
なんか気になる事を言いかけて文には出来ないと断念したアレ。
困った顔をして駿弥は・・・

「それはこの前じゃなくて昨日ってのの。あーあれね・・・なんというか・・・」
「いうか・・・？」
「少し、おしゃべりになったかな。良い意味でだからな。別に五月蠅いって言ってんじゃない」

そうですか・・・。
なんとなく幼いころに戻った気がする。小学生の低学年。
こうしてよく2人で喋っていたのを覚えてないっけ。

「そんなこともあったことだな」
「それ・・・日本語ですか？」
「ちょっとぉー駿弥ぁ」

話しに入ってきたのは朱。昨日と同様なにかさせられるのかな・・・

なんて。
こっちに来たと思ったら駿弥の腕をぐいぐいとひっぱって教室の隅に連れて言った。
聞かれてはならない大事な用ってやつか何かかな。
2人とも仲直りしたんだ。よかった。

「何の話してたの？」

ほら、このあたしが疑問形の文を連発するのは希少価値な光景であるのだよ。
でも、そんなことどうでもいいような顔をして駿弥は

「あー、何でもない」

そう言ってくるりと前を向いてしまった。
やっぱりこては外に漏れてはならぬ機密情報なのか・・・。

次の時間は体育だ。
運動なんて全く出来ない。
小さいころから身体を動かすのってすごく苦手でやらないうちにこんなに駄目駄目になってしまった。
以前言ったように握力はもうログアウト状態で、どうかしたら足の方が強いかもしれないね。
測ったことなんてないけどさ。

「ほーらあずちゃんパッス！」
「はいっ」

蓮華とキャッチボール。

ずっとボール投げじゃつまんない人もいるだろうけどこれは救われる。

「もっとキビキビ動きなってっ！！」

「あー、はい」

あたしは昔から運動音痴だし、生まれつきの喘息でマラソンなんかできやしない。

いつも無理矢理身体を動かしているけど、体育の時間は憂鬱だ。

勉強ならやればなんとかできるけど、これだけは・・・。

「うおりゃあぁっ！」

「うわっ」

蓮華の右手に持たれたバスケットボールがすごい速度であたしの顔面すれすれを横切った。

今のは吃驚した・・・。額から冷たい汗が漏れ始める。

「ごっめん、大丈夫だったっ！？ちゃんと取ってくれると思ったんだけどなっ」

「無理ですよ・・・。恐かったぁ」

空気を走って行ったボールは壁にぶつかり方向転換。

軽やかに弾んでいた・・・。あれ、あそこに見えるものは・・・？

「蓮華、ボールとってくんねっ！」

確かにそうだ。遠すぎて良く見えないけれどあれは・・・。

そうかそうだったのか。昨日の出来事を頭の中で整理する。

そうか。そうだよね・・・。あたしだけのものでは・・・。

もうゆっくりはできないんだなぁ。そう思うととても心が冷えてくる。

「ちょ、ちょっと・・・大丈夫っ！？」

足元が冷たいと思ったら、体育館にペタンと座り込んでいたらしい。
蓮華の鋭い声で目が覚めた。冷え切ったあたしの身体。

「ほーわっと、いっくよ――っ！」
「あっ・・・」

ゆっくりと山を描いて向かってきたボールだったが、足がうまく動かなくてとりそこなってしまった。
こんなことで・・・。だめだよ。しっかり立たないと。

「ちょっとぉ。どーしたっ？また頭痛いのっ？」
「あ・・・うぅん。ちょっとね・・・」

この時間の間はずっと心の中を彷徨っていた。
立ち止まっていた。だってなんかすごく寂しい風が吹き荒れていたから。
この気持ちはきっとそれほど・・・だったのだと思う。
こんな思いをしたのは初めて。それもあたしが今まで消極的だったからなのかもしれない。
こんなに深入りしたのは初めてだったからなのかもしれない。
やっぱりそうなんだなと改めて思うと悲しくて仕方がなかった。

第十五章

さっき、あたしが体育館で目にしたものは・・・朱の姿だった。
その朱の顔は綺麗な桃色をして・・・とても幸せそうだった。
こんなことならあたしだって喜んでいられる。
別にこんなに苦しくなったりはしない。
でも、そう・・・・・その笑顔の理由は。

「んもぉ、体育たのしかったぁー。すごくぅ」

朱はいつもよりはじけた笑顔でいた。
あたしがこんなに暗い気持ちなのに・・・。
朱の事は大好きだけどすごく悔しい。

「どーしたのっ？暗い顔してぇ」

なんだかあたしに「どーだ」といっているように聞こえる・・・。
ほんとうは泣きたい気分だけれど、いつものようにふるまわなくちゃ。
ここで泣いたり、落ち込んだ態度を見せたら・・・それはただのわがままになってしまう。

「ん・・・なんでもない」

頭痛のふりして頭を片手で触る。
こめかみをグリグリと・・・。

「あっそぉ。体育大好きなんだよねぇ」
「そっか。ちょっと・・・ごめん」

すさまじい動きで席をたった。
だって、朱の笑顔を見るのは・・・とても辛いから。
だから他のクラスのあの子の所へ向かう・・・。

「あ、あずちゃ――ん」

実は休み時間とか暇なときはいるもこの子の所に遊びに来てる。
大人っぽい顔立ち。背もあたしより若干高くってとても絵のうまい友達。

「縁ちゃん、あのね・・・」

この子の名前はみどりちゃんではない。ゆかりちゃん。
とりあえず、腕を引いて階段の踊り場へ連れて行く。
この事は誰にも聞かれたくは無いから。

「どぉしたん?あずちゃんらしくないねぇ・・・」

話し方がなまっている・・・何処から来たのか知らないけど小学生のころに転校してきたのは覚えてる。

「さっきの体育の時間で・・・」

あたしはさっき見た事をすべて話した。
そして今まで誰にも喋ったことなかったことも全部。
だって、教えて広まるのもいやだし・・・。

あたしがみたのは、煌びやかな朱の笑顔と腕を組んだ駿弥の姿だっ

た。

第十六章

「え・・・あずちゃんって新田くんのこと好きやったん・・・？
昔からよく喋ってたから幼馴染なのかと思っとった・・・。」
「幼馴染なんて・・・」

昨日なんとなくうすうすわかってたんだ。
朱もあたしと同じ人が好きだったんだって・・・。
あたしと駿弥が何かあれば耳を傾けてくるのもそのためだったとわかった。

「そうなん・・・私に相談されてもちょっと困るんやけど・・・」
「・・・だよね。あ、このことは内緒だから」

縁ちゃんの口が堅いのを解って言った。
この前、縁ちゃんの好きな人を教えてもらった。
だから縁ちゃんが一番伝えやすかった。

「うーん・・・あずちゃん、積極的モードになっちゃえ！」
「え・・・」

あたしにそんなモードなんて内蔵されていない。
でも、あたしが頑張ったって今のあたしと同じ気持ちへ朱を落とすことになる。

「でも・・・とられてもしらんよ？」
「・・・・・・」

ここで諦めた方がいいのかな・・・と思う。

あたしは何も言わずに頭を下げて教室に戻った。
でも、諦める・・・諦められる自信がない。
こんなことで人の心がまがってしまうならこんな気持ちにはならなかったはず。
そう思う。

「あー、やっべ・・・音楽の教科書ないわー・・・おい、あず！教科書っ」

席に着けば駿弥があたしの教科書を求めてきた。
・・・ここで、教科書を貸してしまっていいのかな・・・。
朱はあたしの隣の席だし、絶対わかってしまう。
でも、ここで無視をしては嫌われてしまうんだ。

「あずちゅわーん、聞いてるの・・・？」
「あ・・・うん」
「教科書」

朱はものすごいいきおいで引き出しの中をかきまわしている。
あぁ、これはあたし用無しだな・・・そう思ったからゆっくりと引き出しの中を探検することにした。
すると朱が

「はいぃっ教科書ぉ！」
「ぇ・・・・・・あ・・・サンキュ」
「・・・・・・」

仕方がないよね。あたしの気が弱いからいけないんだ。
こうやっていても報われない事はちゃんとわかってるけど・・・。
自分の意思で走っても何かを失うことはわかってる。

朱は大切な友達なのに、その邪魔なんてできっこない。自分が良いほうに進んでまで・・・。

「けちんぼあーず」

「え・・・」

最後に駿弥がそう言った。

大丈夫。まだ・・・まだあたしと朱は釣り合ってるのかもってあんな言葉で安心する。

でも、これからどうなるかなんてわからない。

とりあえず、今のままでいようと思ってる。

「あ・・・えぇっと・・・見る？」

「ありがとぉ～」

朱だってあたしの事が嫌いではないみたい。

教科書を差し出すと普通に一緒に見ようとしてくれてる。

でも、ただ・・・自分の方が上に立ちたいみたい。

「なぁ～んっか・・・駿弥ってあずをあてにしてるよねぇ」

「えっ・・・？」

「いいよねぇ、そんなのって」

「あの・・・やっぱり朱って・・・駿弥が」

「な、なな何・・・？えぇっとぉ・・・音階書かないのっ？ね～ぇ」

みるみるうちに朱はカァっとなって・・・誤魔化そうとしてる。

そういうところ、とても可愛いんだとおもう。

ほほえましいけど、やっぱり勝てる気がしてこないのも確かだな。

第十七話

その数日後のこと・・・。

「おめでとーじゃんかっ。まさか朱が先とはねぇ～」

蓮華はぴょんこぴょんこと跳ねながらそう言った。
おめでとう。そう言おうとした時だった。

「まさか朱に彼氏さんができるとはっ・・・！まぁ、蓮華にはまだ先の話だろうけどねっ」

そうかな・・・蓮華は正直、朱より美人だと思う。
朱が可愛くないって意味じゃないけど。
でも、それっぽいオーラがある。言葉には表しにくいけど。
彼氏さん・・・・・・あたしだって欲しかったよ。
でも、もういらない。誰もいらない。

「アタックしたら数日後に駿弥がＯＫくれたのぉ。積極的になってよかったぁって思ったぁ」

ちょっとヌけてて、天然で朱は可愛いから・・・。
それに、あたしと違ってどこか大人っぽくてお姉さんって雰囲気があるんだよね。
性格は全然違うけどさ・・・。やっぱりそういう系統の方がいいんだろうなぁ。

「蓮華とぉ、あずちゃんもモテるってぇ。すぐに彼氏ぐらい出来るよぉ。

蓮華はかっこいいしぃ・・・あずちゃんは大人っぽくていいしぃ」
大人っぽいのは性格だけで・・・いや、それは単に大人しいだけなのかもしれない。
いままでなるように流れていけばなんとかなると思っていたけど、やっぱり違うんだ。

「かっこいい？ありあとさんっ。蓮華カッコイイ女の人憧れてんだっ」
「うんうん、ちょっと凶暴かもしれないけどぅ・・・そこもいいんだよぉ」

なんだか残念な気持ちでいたけど、別に今のままでもいいと思った。
まだ完璧に諦めたわけじゃないんだけど・・・。
あたしの一番の短所はそこなんだ。人の顔の色ばかり疑って自分に言い聞かせてたんだ。
あたしは悪い子なんだって。

「なぁーんか最近楽しいなぁっ。別にこの件があったからじゃないんだけどねぇ」
「もーすぐテストなんて・・・蓮華はつまんないっ」

それぞれ勝手な事を口に出している・・・。
よくこんなんで隣を歩いて行けるなぁと思う。
気が合わないとか、そろそろ思わないのかね・・・。
そろそろ休み時間が終わってしまう。
なんだか鬱だねぇ。何もやる気がおらないほどではないんだけど・・・。
心の中は固まりもしないモヤモヤがのびのびと浮遊している。
その機体が動くたびに胸の奥が気持ち悪い。

「お早う、お姉ちゃん」
「ん・・・あ・・・」

もう4時限目だけどさ・・・。
そんなことをつっこむ気にはなれなかったね。
お願いだから、今のあたしには絡まないでほしい。
心の整理をつけなきゃ。
それなのにそんなにあたしの顔を見つめて・・・。胸が注射針で刺される。

「ちょっとはつっこめってば。あー・・・”こんばんはだよ弟くん”みたいにノッてもいいけどさ。
というか・・・なんかあったわけ・・・？今日はやけに大人しいなぁ」
「そうかな」

通常モードのつもりだよ。表向きはね。
壁の裏のあたしはもたれかかってひとりで泣いているけど。
いつも心はこんな感じだから、心配することは無いんだけど。
意外とすんなりと涙が流れ落ちてくるなぁ。

「おぉ～い？俺の顔はお前の机にはないんだぞ。机になんかあんの・・・？」
「ぁ・・・ごめん」

落ち込みすぎて机しか目に入ってなかった。
落ち込みすぎてそれにすら気づいていなかった。
人形のように返事をしているだけだった。
本当は絡んでほしくないかな・・・そんなことを言える勇気は無い

けど。

「あ、わかったぞ。あずちん頭痛症候群でしょう？」
「・・・何それ」
「いつもお前、頭痛いとか云ってたじゃん。それ」
「あぁ・・・」

どうしてこんなにも駿弥は絡んでくるのだろう。
少しは朱の嫉妬心くらい考えてあげればいいのに。
でなきゃあたしのせいで苦しんでる朱を見てるのがつらいよ・・・。
でも口を瞑る。

「こんばんはぁ、弟くぅんっ」
「あ・・・朱じゃんか。俺は前の弟になった記憶は無いんだけど」
「はいはいぃ、あずちゃんのが面倒見よさそうだもんん」

そう言ってもらえるとうれしいかも・・・。
親戚同士で集まったときなんか、保育士さん状態。

「ねぇー、今日遊びに行ってもいいでしょぅ？せっかくなんだよぉ。初めてなんだよぉ――っ！」
「ん・・・はいはい」

朱と駿弥って組み合わせは想定外だったかも・・・。
なんか、蓮華とは意外といいコンビでいそうだったんだけどね。
見ているのが苦しいのは仕方がないよね。誰だってそうだよ。
胸の奥の奥がキュゥンと縮こまるような感じ・・・。
なんだか気持ちがいいけど気持ち悪いこの曖昧な感じ・・・。
嫌いじゃないかもしれない。

第十七話（後書き）

ちょっと失敗したなぁと思い始めました。
主人公のあずですが、ちょっと冷めすぎてますねw
このキャラクターが1番私に近い性格になってきてしまったと思います。
今更ですが、本当はもっと明るくて女の子らしいキャラの方がよかったかな・・・なんてね。

そんなこと言ったら余計落ち込んでしまうので続行させることにします・・・。

第十八章

お弁当の時間ってなんだか楽しみでならないよね。
お腹がもうペコペコなんだけど、４分の１ほど食べると満腹に近づいてくるのはあたしだけだろうか・・・。
むりやり身体に流し込むが、家に帰る前にお腹がすく。なんでだろうねぇ。

「わぁーあずちゃんのおべんと美味しそぅ～」
「ありがとう・・・」

朱は何か物欲しそうにあたしのお弁当を毎日のぞいてくる。
そんなに何度もおんなじ台詞を吐かなくてもいいのに。
いつか自分で作ってみたいとは思うけれど・・・朝が弱いので無理。
絶対。

「なぁーんかいっつも卵焼きはいってるじゃぁん。好きなのぉ？」
「うーん・・・普通かな」

言われてみれば毎日卵焼きはいってる。
親の趣味なのかな・・・。黄色を入れると明るくなるしね。
朱のお弁当は・・・いつもフルーツが添えてあるよね。

「そうなんだよぉ。妹たちが果物大好きだからついでに朱も入れてもらってるの」

妹・・・いいなぁ。うちの家には弟しかいないしなぁ。
妹がいたら着せ替え人形にして遊んであげるのに。
洋服着せたり・・・髪の毛括ってあげたり

「それがぁ、最近自分で髪結ぶようになっちゃってぇ・・・それにぃ、服の趣味も違うから困るんだよねぇ」
「そっか」

妹のいるお姉さんも大変なんだなぁと思う。
さっきから水分を一滴(ひとてき)も口に含んでないので喉が渇いてきた。
牛乳牛乳・・・・・・

「あー、朱も牛乳のーもぉっ」
「んぎゅ・・・・？」

うちの学校は・・・牛乳はパックじゃなくて瓶。
瓶の牛乳・・・周りの学校はほとんどがパックらしいけど・・・。
これがまた開けるの大変で・・・中々開かない。
無理に引っ張ってあいたときにその白い液はまだ新しい制服を悪臭とともに染める事になるだろう。

「どぉしたのぉ？あかない・・・・？」
「・・・みたい」

朱は結構ポコッと開けた。これって瓶が悪いんですよね・・・？そうですよね。

「貸してみ、俺があけちゃる」
「え・・・」

またしても駿弥が絡んできた。
朱の居る前で・・・ちょっとは自重してほしいかもしれない。
朱が見てると駿弥との時間もあまり楽しく感じられないから・・・。

「ほーら、貸してよ」
「いやぁ・・・いいよ」

なんなら牛乳は飲まなくていいかもしれないなぁ。
勿体ないけど、今日は牛乳なしで頑張ろうか。
いや、他の人に開けてもらえば別になんてことないんだ。

「あけてあげるって言ってるのに」
「いいって言ってるのに・・・」

こんなこと言うと、もうこっちを向いてくれなくなっちゃうかもね。
心のブレーキくらいかかるものなんだよ。ちゃんと。

「解った、ちょっとまった」
「え・・・」

プカッ　ふたのいい音がした。
開けた瓶を駿弥はあたしの机の上に置いた。

「それ、あげる。飲んでいいよ。で、お前の右手のそれちょうだい」

駿弥がくれたのは開けてくれた牛乳。
元は駿弥のものだった牛乳。
もちろん飲みかけなんかじゃない。
いらないのに・・・もらったら・・・心の整理つけようと思ってるのに・・・。
邪魔をしないで。

「俺、牛乳無いんだけど・・・それちょうだいって」

「あたし、牛乳いらない」

牛乳を駿弥に返した。だって・・・。
だって朱のせつない顔がすぐ目の前にあるから。
あたしたち、なんでこんなに近くの席なんだろうって思った。
もっと離れていれば他の人に開けてもらえたし、
朱と駿弥の事もきにならないし、もとはと言えば手を握り合うこと
もなかったはずなのに・・・。

「・・・じゃあ・・・これ俺の牛乳」

駿弥は何事もなかったかのようにいっぱいだった牛乳を飲みほした。
心の中であたしは駿弥に謝った。
ここでは言えないけど・・・ごめんなさい。本当にごめんなさい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5818l/

あたしの握力計

2010年10月28日07時37分発行